生涯スポーツとしてのアーチェリーの競技環境に関する研究
A study on an Athletic Environment of Archery as a Life-long Sport

1K06B234　　山中　将弘
指導教員　主査　作野誠一先生　　副査　木村和彦先生

【緒言】

2000 年に文部省（現文部科学省）は『スポーツ振興基本計画』を公表した。この計画は急速に進む少子高齢化社会であっても、すべての国民がそれぞれの体力や年齢、技術、興味・目的に応じて、スポーツを楽しむことのできる社会を目指している。生涯スポーツは「だれでも、いつでも、どこでも、いつまでも」という4つの条件に当てはまるスポーツが適当であるが、その意味でも健常者と障害者が一緒になって行えるアーチェリーは生涯スポーツとして普及させていくべき種目ではなかろうかと筆者は考えた。

現在アーチェリーの普及や競技環境に関する先行研究は非常に少ないことから、アーチェリーの競技環境を把握し、普及における課題やヒントを明確にすることは重要なことであると考えられる。本研究はアーチェリー競技者へのアンケート調査を通じて、アーチェリー競技環境が抱える課題・問題を包括的に把握することによって、今後アーチェリーを生涯スポーツとして普及させていくための基礎資料を得ることを目的とする。

【研究方法】

調査票の質問項目は競技環境に関する質問項目と武隈(1991)のスポーツの便益に関する質問項目を参考に新たに作成したアーチェリーの便益に関する質問項目とで構成した。調査の対象は都内の高校生以上の競技者で、調査票を高校、大学、アーチェリー場、試合会場、アーチェリーショップ等に対して直接配布・回収した。配票数は256票に対し、回収数は197票、回収率は76.9%であった。

【結果】

アーチェリーの競技環境は部活動がきっかけで始めた競技者が非常に多いことや、道具の価格が高いと感じているのが大多数であること、20 代が指導者となることに関心があること、初心者や大学生の大会の整備が必要なこと、アーチェリーをやめたいと思ったことのある理由では「上達しなかったから」という回答が多いことなどが明らかになった。

また、アーチェリーの便益構造を因子分析した結果、11 の因子が抽出された。因子はそれぞれ、「トレーニング」、「交流」、「情報」、「トレンド」、「アクセサビリティ」、「指導者」、「体力維持・向上」、「技能向上」、「練習環境・効用」、「施設」、「科学的知識」と命名された。

「情報」、「体力維持・向上」、「技能向上」、「科学的知識」などの因子において、属性ごとに統計的な有意差が認められ、若い世代のアーチャーは技能向上や科学的知識の習得に熱心で、高齢になるほどアーチェリーとの関わり合い方は多様になり、情報への期待が高くなることがわかった。

【まとめ】

アーチェリーが生涯スポーツとして普及する上で、競技環境を整備する必要がまだまだあるということが本研究を通じて明らかになった。競技人口を支えているのは依然として学校部活動であるが、今後は地域のアーチェリークラブやアーチェリー協会が、初心者講習会を定期的に開催したり、情報をポスターやインターネットなどで周辺住民に認知してもらうことでアーチェリーへの導入をより推進していく必要があること、上達しないこ

とでアーチェリーをやめたいと考える人が多いことから、セミナーを開いたり、技術や道具などに関する知識を本や指導者を通じてアーチャーに伝える必要があること、情報が十分に行き届いていないので、インターネット上の情報を充実させたり、ショップがメルマガの配信などをすることで情報を提供する必要があることなどが具体的な対策として提起された。今後はそういった競技環境と情報提供システムの整備が課題であると考える。